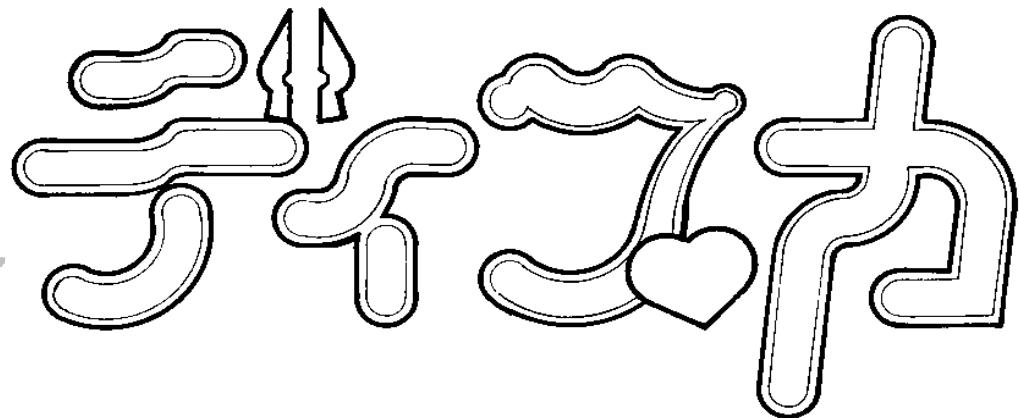


月刊
JMITU



5月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部
セガ グループ分会 2024年発行

No.473

2024年定額減税よりも消費税減税ではないか。

今年3月に、物価高対策と

して1人あたり4万円の定額減税を実施するための所得税法と地方税法の改正案が可決されました。

税を予定しています。

定額減税の対象者は、所得納税者で、合計所得金額が1805万円以下の方、住民税では令和5年分の合計所得金額が1805万円以下である所得割の納税義務者です。

消費税は、逆進性で、収入が少ない人ほど、収入に対する税の割合が大きくなる傾向があります。これは、食費や日用品などは必ず消費する必要があるため、収入が少ない人が収入に対する消費が多くなるからです。

減税されるのはうれしいですが、2024年の1年限定です。たった1年減税しただけでデフレから脱却できるのか定率減税は期間限定で実施された場合、その終了時に増税になる可能性があります。

消費税は社会保障のためにという名目ですが、現役世代の年金支払額は増え、社会保障は悪化の一途、一方法人税率は下げてきています。

大企業は、消費税をもつと上げるよう政府に要望しています。輸出大企業は、国から還付された消費税還付金額が

的で望ましくありません。

物価が上がっている状態でのデフレ脱却には、消費税の減税もしくは廃止が一番の特効薬です。

消費税は、逆進性で、収入が少ない人ほど、収入に対する税の割合が大きくなる傾向があります。これは、食費や日用品などは必ず消費する必要があるため、収入が少ない人が収入に対する消費が多くなるからです。

その他にも、自民党の裏金問題、能登半島地震の復旧はどうなったのか、大阪万博建設コスト増大と世論の開催不

要、防衛費の拡大とミサイルなどの殺傷能力のある武器の輸出を解禁とにかく世論とは違う方向に流れている今の日本を変えなければなりません。まずは今後の選挙で今の自民党にNOを突き付けるしかありません。

過去の決算に基づく推計によれば、大手自動車会社の還付金額は約1兆9千億円に達しています。この金額は、輸出免税制度（輸出取引には消費税免除）や仕入税額控除方式によって税務署から還付金で支払われています。

過去の決算に基づく推計によれば、大手自動車会社の還付金額は約1兆9千億円に達しています。この金額は、輸出免税制度（輸出取引には消費税免除）や仕入税額控除方式によって税務署から還付金で支払われています。

この定額減税は、長く続くデフレを脱却し、賃金上昇と相まって、国民所得の伸びが物価上昇を上回る状況をつくり、デフレマインドの払拭と好循環の実現に繋げるためにという理由で行われています。

岸田首相が経済対策の目玉として言われていますが高所得層も対象でバラマキ色が濃く、選挙対策ではと言われています。

長期的な視点で所得税の限界税率の区分を見直すことなく、小手先の減税に終始することでは経済的な効果は限定

6月から、1人につき所得税3万円と住民税1万円の減

唯我獨尊

仙洞田一彦

集会所の一室。二十人くらい入れる部屋は、参加者で一杯だった。ある文学サークル主催の作家先生を囲む会で、サークル外からの参加も可能だつた。先生が出した本の小説をもとに語り合いましょうというのだ。もっとも文学、小説に関する話題、書き方、読み方、何でもいいという。私も文学に興味があるから参加した。

始まつて一時間ほど経つが、何か変なのだ。司会が「いかがですか」と言うと手が上がる。指名された人がしゃべる。先生への質問が出る。するとすぐ、八十歳は過ぎていると

も無視できない。なるべく指したくないようだが、他に手が上がらなければ指すしかない。おじさんは先生に質問したいわけではなさそうだ。それなら黙つてくれればいいのに、会場から質問が出るといふに、すぐに手を挙げて発言する。関連する質問ならわかるが、そうではない。質問者に回答するのだ。どこかであつた事件のようマイクを切るわけにもいかないし、「もっと簡単に」「そろそろまとめください」と発言を制限、封じたりしたら、和やかな雰囲気もすつ飛んでしまう。

思われるおじさんの手が上がる。そのおじさんは、先生に向けられたはずの質問に答えなのだ。手が上がる所以司会

和服姿の作家先生は、目の前

のやりとりを静かに笑つて見ている。見るからに控え目な女性だ。

参加者は男女半々、年齢はほとんどが四十年代くらいから上のようだ。

自分が作家先生と勘違いしているようなおじさんの発言内容を聞いてみると、文学、小説をいくらか知つているようだ。周りの人と接している雰囲気からすると、私と同じでサークル外の人間らしい。

講師の話は良かつた。偶然に良い拾い物をしたような感じだつた。しかし閉会挨拶を聞いているうちに、その喜びも失せてきた。

質問への考え方を見ていると、自信満々である。このおじさんの姿から、いくつかの情景が浮かんだ。

私は講演会場の椅子に腰掛け、閉会挨拶だから、講師に講演の労をねぎらい、聴衆にも礼を言つて閉会ではないのか。挨拶を聞いてみると、講演の補足、解説のように聞こえる。補足というのは私の遠慮した言い方で、正確に言えば蛇足。

よくしやべる。閉会の挨拶というのにいつまで続けるのだろうと思つていた。

講演会場は百人収容くらいの座席数だ。たしかバブル崩壊後の経済についての講演だった。表の看板に書いてある

講師が、たまたま読んだ本の著者だつた。それでふらりと入つたのだ。

早く会場を出たくなるような内容だ。演壇の横に置かれた椅子に掛けている講師の顔も、

しわに力が入っていて、迷惑になるのをこらえているようになっている。立場上、挨拶している人に「もう止めたまえ」とは言えないのだろう。講師に対し、同情の念が私に湧き上がる。

私としては著書の感動に、

直に著者の声を聞いた感動が重なり、良かつたと思つていった。すぐに終わりそうにない閉会挨拶に付き合う必要はないのだが「終わるか」「もう終わるか」と思つていて、うちに、ずるずると居てしまった。

この閉会挨拶をしている人はどんな性格の人だろうと考えた。講師のことを「先生」「先生」と持ち上げているが、

挨拶の内容を聞いていると、俺の方が偉いんだと言つてい

るようだ。「閉会挨拶」の下に

書いてある名前を見たが、聞いたことのない人だ。未熟な後輩の講演に補足、蛇足を付け加えている先輩か。それとも「オレが」「オレが」とあたりかまわず自分を押し出すにはいられない輩なのか。

会場にゴトゴト音がし出し

た。さすがに後ろの席から、人が立ち始めた。閉会挨拶者も、あわてて言葉を締めた。

私も会場を出た。感謝の気持ちが、迷惑を蒙ったような感情になつてしまつた。

ボスターか看板を見て入ったのだと思う。

映画は期待通りだつた。比

較的筋の単純なアクションものと違い、胸にジーンとくる映画だつた。とはいつても筋が分かりにくいわけではない。主催者閉会挨拶が大変だつた。どうせすぐ終わるだろうから、付き合つて聞くかと思つて坐つていた。

閉会挨拶は、まずあらすじ紹介から始まつた。映画を見る前だつたら、映画のチラシにあるような、あらすじ紹介もありかもしれない。映画を観終わつたばかりだ。いちい

て「あんたに言われたくない」と聞く必要もない。何年か前に上映した映画の話でもするなら別だが、今終わつたばかりの映画のあらすじを言うことはないだろうと思つていた。

次に思い出したのは映画を観た時のことだつた。映画館ではなかつたので、自主上映か、何かだつたろう。これも

しかも親切丁寧というか、シリオを読むように細かい。

途中から一段、声のトーン

が高くなり、私はこういう所に感動したと叫んだ。自分だけ高ぶつていて。感動まで押しつけてくる。感動なんて、いか。おかげで、私自身の感動まで白けてしまつた。

映画のチラシだつて配られているんだから、感動を再確認するんだつたら、それを読めばいい。解説を読みたい人は、自分で読めばいいじやないか。

「あんたに言われたくない」と閉会挨拶者に言つて会場を後にしたかつた。普通の映画館のように、館内が明るくなつたら解散がいい。どうしてもしやべりたかつたら「外は

もう暗くなっていますから、お足元に気をつけてお帰り下さい」とでも言えばいい。

映画というものを初めて見

て、感動のあまりしやべった

とは考えにくい。映画よりも

自分を売り出したかったのか。

観客が愚鈍に見えて、教えて

やらなきやわからない連中と

思つたのか。いや本当に感動

しちやつたのかな。会場を出

ても、頭をよぎるのは映画で

はなく、閉会挨拶はどうい

う人間、性格をしているんだ

るうという疑問だった。

どこの集まりだつたか忘れ

てしまつたが、話を元に戻す

奴がいた。何を議論していた

かも忘れてしまつたが、議論

が煮詰まつてきて、ああい

感じだなと思うとそいつが発

言して、話が蒸し返されてし

まつた。「もう少し空気を読ん

だらどうだ」と言いたくなる。

「聞きたいのはお前の意見じ

やない。それはもう聞いた」

と言いたくなる奴が一方にい

れば、片方には空気を読み過

ぎて、いる奴がいて「一体、お

前の考えはどうなんだ」と言

いたくなる奴もいることは居

ると、自分を考えた。

「はい」

女性の元気な声がして、記

憶の中にいた私は我に返つた。

「小説の読み方を教えてくだ

さい」

女性は言つた。すぐにおじ

さんの手が上がつた。

「はい」

「私は先生のご意見を伺いた

いんです」

女性はきっぱり言つた。私

ばかりではないんだ。みんな

思つていたんだ。私は心強く

思つた。

「先生、お願ひします」

司会が言つた。

作家先生は背筋を伸ばして

言つた。

「小説の読み方……そうです

ねえ。うーん。なんと申し上

げたらわかつていただけるん

でしようかねえ。まず空気を

読むことですね、その場の」

ムツ、と笑いをこらえるよ

うな雰囲気になつた。作家先

生が続けた。

「そして誰が主人公、主役で

あるか、間違えないことです。

往々にして、自分が主人公と

いう強い思い込みに陥ること

もありますからね」

かなり露骨と言えば露骨。

主役を奪われた恨みが込めら

れているかもしねれない。

「ハツハツハハハ……」

こらえていたみんなの笑い

が爆発したようだ。

あのおじさんだけは笑わな

いで、左右に首を動かしてみ

んなの顔を見ていた。それか

ら慌てて手を挙げて「はい」

「はい」と、司会の方を見て

繰り返した。指名されないう

ちに、手を挙げたまま言つた。

「先生、それは違う。違いま

すよ先生。小説の読み方はで

すね。行間を読むことです。

その、あの、言葉に隠された

真意を読み取らなきやいかん

ですよ。そういう読み方をせ

にや。そういう敏感さという

か、繊細さが必要なんです」

溜息も聞こえてきた。